

令和七年十月度 御報恩御講拝読御書

内房女房御返事

弘安三年八月十四日

五十九歳

妙法蓮華經の徳あらあら申し開くべし。毒藥變じて藥となる。

妙法蓮華經の五字は惡變じて善となる。玉泉と申す泉は石を玉と

なす。此の五字は凡夫を仏となす。されば過去の慈父尊靈は存生

に南無妙法蓮華經と唱へしかば即身成仏の人なり。石變じて玉と

成るが如し。孝養の至極と申し候なり。

令和七年十月度 御報恩御講 『内房女房御返事』 (御書一四九二、一〇行目、一二行目)

【通釈】

妙法蓮華經の功德をおおよそ申し上げ明らかにしよう。「毒藥変じて藥となる」と説かれている。妙法蓮華經の五字は悪を善に変える。玉泉という泉は石を玉にする。(同じように) この五字は凡夫を仏にする。よって、先に亡くなった慈父尊靈は、生前に南無妙法蓮華經と唱えたので即身成仏の人である。石が変じて玉となるようなものである。(このように親を妙法へ導くことを) この上ない孝養というのである。

【主な語句の解説】

毒藥変じて藥となる：『大智度論』に「大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」(大正蔵二五―七五四)とある。爾前經では、歷劫修行によつて煩惱を断じることと菩提(悟りの智慧)を得るとされた。これに対して法華經の肝要・南無妙法蓮華經には、十界・三千の諸法が悉く具わっているため、これを受持信仰すれば、成仏の因果を同時に得て、煩惱〔毒〕そのものが菩提〔藥〕となり、成仏の境界を開くことができる。

玉泉：入れた石を貴重な玉(ぎよく・寶石)に変える湧き水のこと。

【背景と大意】

本抄は弘安三(一二八〇)年八月十四日、日蓮大聖人御年五十九歳の時、身延より駿河国庵原郡に住む女性信徒・内房女房に与えられたお手紙です。これは、先に女房より、亡き父親の百箇日忌の追善を願ひ出るため、大聖人へ御供養とともに願文が届けられたことへの返書として認められたものです。

その願文には、法華經一部並びに方便品・寿量品の読誦、そして五万遍の唱題をもつて父親の追善に供えたことが記されています。これに対し大聖人は、先祖の菩提を弔うため法華經を読誦する人は多いが、五万遍もの唱題を行ったことは前例がないとして、その功德の大きさを説かれています。次いで、邪宗の家に生まれた者は、いかに持戒尊貴であったとしても、謗法のため墮地獄は免れないと教示されます。しかるに、本日拝読の箇所では、妙法蓮華經に、一切の悪を変じて善となし、凡夫を仏とする不可思議な功德が具わることを示されます。そして、生前に題目を唱えた父親を「即身成仏の人」と仰せられ、その因縁を作った女房は、最高の孝養を尽くしたことになるかと賞賛されています。

最後に、輪陀王と馬鳴菩薩、白鳥と白馬の譬えを用いて、亡き慈父は、女房が唱える題目の声を聞いて成仏の境界に住していると述べ、重ねて女房の孝養を褒め讃えられ、本抄を結ばれています。